

春の断想

浅野幸治

少し長いが引用してみよう。

何十万という人間が一つの小さな場所へ集まり、そこで互いにせり合っ
て、その土地をみにくくしようとどんなに骨を折ったところで、またその
地面に何もはやさないようにとどんなに石を敷きつめたところで、また萌
え出てくる草を一本残らずたんねんに取りつくしたところで、また石炭や
石油でどんなにいぶしたところで、またどんなに木を刈りこんだり、鳥や
獣を追っばらったりしたところで、——春はやっぱり春であった、都会の
中であつてさえも。太陽が暖めると、草はよみがえって、根こそぎにされ
なかったところならどこでも、並木街の芝生の上ばかりでなく、敷石のあ
いだからさえ萌えだして、いたるところ青い色を見せてくるし、白樺や、
白楊や、みぎくらなども、ねばりのある香りたかい若葉を開き、菩提樹は
はぜた新芽をふくらましてくるし、鴉や、雀や、鳩なども、春の喜びにみ
ちて、はやくも巢の支度をはじめ、日あたりのいい壁には、蠅がぶんぶん
うなっていた。こうして、植物も鳥類も、昆虫も子供も、みな嬉々として
楽しんでいた。（トルストイ『復活』中村白葉訳）

この『復活』の有名な出だしを、トルストイが書いたのは1890年代でした。それ
から60年余り、アメリカのレイチェル・カーソンは『沈黙の春』という書物を著
して、次のような寓話を書きました。

ところが、あるときどういう呪いをうけたのか、暗い影があたりにしの
びよった。いままで見たこともきいたこともないことが起こりだした。若
鶏はわけのわからぬ病気にかかり、牛も羊も病気になって死んだ。どこへ
行っても、死の影。農夫たちは、どこのだれが病気になったというはなし
でもちぎり。町の医者は、見たこともない病気があとからあとへと出てく
るのに、とまどうばかりだった。そのうち、突然死ぬ人も出てきた。何が
原因か、わからない。大人だけではない。子供も死んだ。元気よく遊んで

いると思った子供が急に気分が悪くなり、二、三時間後にはもう冷たくなっていた。

自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は、からっぽだった。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶるからだをふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、コマドリ、スグロマネシツグミ、ハト、カラス、ミソサザイの鳴き声で春の夜は明ける。そのほかいろんな鳥の鳴き声がひびきわたる。だが、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地——みな黙りこくっている。

農家では鶏が卵を産んだが、雛は孵らず、豚を飼っても、何にもならなかった。小さい子ばかり生れ、それも二、三日で死んでしまう。リンゴの木は、溢れるばかり花をつけたが、耳をすましてもミツバチの羽音もせず、静まりかえっている。花粉は運ばれず、リンゴはならないだろう。

かつて目を楽しませた道ばたの草木は、茶色に枯れはて、まるで火をつけて焼きはらったようだ。ここをおとずれる生き物の姿もなく、沈黙が支配するだけ。小川からも、生命という生命の火は消えた。いまは、釣りにくる人もいない。魚はみんな死んだのだ。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹築一訳)

引用が非常に長くなってしまいましたが、トルストイが書いた光景と、カーソンが描いた光景は大変違います。それが20世紀の産業化がもたらした違いです。もちろん、カーソンが描くのは寓話であって、その通りの町がどこかにあるというのではありません。しかし、私が中学生だった頃、姫路の海では奇形の魚がよく釣れました。最近でも、日本中でメダカが生息する河川が減ってしまい、今やメダカは絶滅危惧種に指定されています。そして究極の、地球規模の環境破壊は地球そのものの温暖化です。一体、私たちは何をしてきたのでしょうか。産業化とは要するに、便利さ、快適さを求めること、欲望の追求です。確かに私たちの生活は便利で快適になりましたが、はっきり言って、それは自分の欲望を充たすことに他なりません。そのために私たちは自然を犠牲にしてきたのです。ところが、自然は神様からの贈り物、賜物です。その自然を私たちが勝手に破壊してよい訳はありません。

私たちは、地球に優しい生き方を探っていく必要があります。そのためにまず、自然を破壊するような生き方に別れを告げましょう。

(付記 この小文は、紙数の関係から少し短くした形で緑ヶ丘カトリック教会編『緑ヶ丘教会だより』第77号(2001年3月)、4頁で発表したものである。)